概説日本史

黛 弘道・鈴木英雄・大石慎三郎・鳥海 靖 編

有斐閣選書

史実の知識の集成をこえ歴史像を豊かにつくり上げられるようにした新しい日本史入門。従来の網羅的通史システムをとらず、時代の特徴を浮彫りにできるテーマ、歴史学の論点となっているテーマを選び出し、平易に解説した。

概説日本史

黛 弘道・鈴木英雄
大石慎三郎・鳥海 靖 編

有斐閣選書

概説日本史　〈有斐閣選書〉

昭和52年2月20日　初版第1刷発行
昭和55年3月20日　初版第4刷発行　¥1,300.

編者　黛弘道（まゆずみ ひろみち）
鈴木英雄（すずき ひでお）
大石慎三郎（おおいし しんざぶろう）
鳥海靖（とりうみ やすし）

発行者　江草忠允（えぐさ ただあつ）

発行所　株式会社有斐閣
東京都千代田区神田神保町2～17
電話　東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕　振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕　文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕　左京区田中門前町44

印刷　理想社印刷所・製本　明泉堂製本
© 1977, 黛　弘道・鈴木英雄・大石慎三郎・
鳥海　靖. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1321-081461-8611

はしがき

「歴史とは何であろうか」というしごく常識的な設問に対面してみると、それに対して答えることは思ったほど容易なことではない。

歴史とは過去にほとんど無限にまで続いているわれわれ祖先の生活の総体であり、歴史学とはその総体的な探究である。そのためにはまず、ちょうど考古学の発掘のように、過去を知る手懸りになる史実（事実）を可能な限りの手段を講じて確定しなくてはならない。この作業は〝言うは易く行なうは難し〟ということわざがまさにぴったりするように、たいへん困難な作業と、それに何よりも無限に続くかと思われるような忍耐力とを必要とする。今日の大学の史学科あたりで行なわれている歴史学というのは、おおむねこのような史実認定のための基礎訓練である。歴史学とは文明評論のような〝華やかな格好よい学問だ〟と早合点して史学科に入って来た学生が、まず驚き戦意を喪失するのはこの点である。

しかし、このような史実考証が歴史学のすべてではない。何故なら、史実とは過去の人間生活総体のある限られた断片であって、どれほど多量にそれを集積してみても全体にはならないからである。そこに高度の知的操作を必要とする歴史像の復原作業が登場してくるのである。「歴史とは過去と現代との対話である」という有名な言葉があるように、対話する現代側の主体の役割がここでは大きな意味をもつので、〝自分は頭が切れる〟と自負している諸君がもっとも生きが

いを感ずるところである。しかし、この歴史の復原作業で実際に問われるのは、単に頭が切れる、切れないといった許与的なものではなくて、その人の全生活をかけて身につけた人間総体である。

つまり、歴史とは、過去とそれに対面する個人の人間総体との対話であり、またその対話自体がその人の人間総体を豊かにするといったものであるといえよう。

さて、若干理屈めいたが、本書の編さんにあたっては、広い各層の方々に、前記のような意味で日本史と取組む手懸りを提供できればということを、その狙いの一つとした。したがって日本史の専攻者のみを対象としたような考証的かつ網羅的通史システムをとらず、大学の教養課程はもちろんのこと、短大や各種学校段階でも日本史に興味をもつ者であれば理解がとどくようにとの配慮から、各時代の特徴を浮きぼりにできるようなテーマをえらんで全体を組みたて、それに現段階で論点や焦点になっている問題を配するという方法をとった。もちろん、叙述表現は簡明を旨として難解な専門的用語はできるだけさけるよう努力した。

本書が読者の皆様の日本史への関心をかきたて、それとの対話の手段ともなれば編著者一同の幸いである。

一九七七年一月

編　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はしがき

第I章　古　代　1〜62

1　古代国家の成立……〔黛　弘道〕……2
1　原始の日本……2
2　倭人の登場……3
3　大和朝廷の日本統一……5
4　倭の五王……7
5　継体・欽明朝……9
6　推古朝政治の展開……11
2　大化前代の社会構造……〔志田諄一〕……14
1　原始・古代の社会……14
2　氏と姓……17

3　部民制の構造……19
4　部民制の展開……22
5　部民制の歴史的意義……23

3　律令国家……〔高橋　崇〕……25
1　律令国家の成立……25
2　律令国家と民衆……29
3　律令国家の崩壊……33

4　王朝国家……〔坂本賞三〕……36
1　古代から中世へ……36
2　王朝国家の成立……39
3　王朝国家支配の再編成……42

5　荘園制と武士団……〔鈴木国弘〕……48
1　「富豪層」の登場……48
2　国衙領と国衙軍制……50
3　武士団の成立……53
4　武士団の構造……55
5　「荘園制」の形成と武家の棟梁……58

第Ⅰ章・参考文献……62

第Ⅱ章　中　世　63～122

1 鎌倉幕府論……〔鈴木英雄〕…64
1 鎌倉幕府の成立……64
2 御家人制と守護・地頭制……67
3 承久の乱……69
4 執権政治……72
5 得宗専制……73
2 南北朝内乱と室町幕府……〔鈴木英雄〕…76
1 建武政権……76
2 南北朝の内乱……79
3 室町幕府体制の確立……82
3 中世の都市と農村……〔佐々木銀弥〕…87
1 荘園制の変質……87
2 国人領主層の動向……90
3 惣村の成立と矛盾……92
4 中世の都市と商業……94

5　中世都市の自由と自治……97
4　下剋上の社会……〔田代　脩〕……100
1　土一揆とその展開……101
2　戦国大名と領国支配……106
5　中世の文化……〔中尾　堯〕……111
1　鎌倉仏教……111
2　東山文化……116
第Ⅱ章・参考文献……122

第Ⅲ章　近　世　123～208

1　織豊政権……〔三鬼清一郎〕……124
1　全国統一の進展……124
2　検地と石高制……126
3　キリスト教と南蛮貿易……129
4　安土・桃山文化……132
2　幕府と藩……〔藤野　保〕……135

目　次

1 幕藩体制の特質……135
2 江戸幕府の権力構造……138
3 幕藩関係と領国体制……142

3 都市と農村……〔大石慎三郎〕……147
1 都　市……147
2 農　村……153

4 幕政の流れ……〔山中寿夫〕……159
1 幕政の転換と元禄・正徳の治……159
2 幕政の改革と諸藩の治……162
3 幕藩体制の危機とその対応……165

5 鎖国と開港……〔荒居英次〕……170
1 鎖国の形成……170
2 鎖国下の長崎貿易……176
3 開港と幕末貿易……180

6 近世の商業……〔林　董一〕……184
1 商　業……184
2 商　人……187
3 商行為……193

7 近世の思想と文化……〔今中寛司〕……196
1 現世主義……196
2 絶対王政とその批判思想……198
3 商業資本と市民的倫理……201
4 写実と実証……204
5 日本のナショナリズム……206
■第Ⅲ章・参考文献……208

第Ⅳ章　近　代

209〜307

1 明治維新論……〔毛利敏彦〕……210
1 維新変革の基本的内容……210
2 明治維新の政治過程……214
3 近代天皇制国家＝絶対主義説批判……219
2 明治憲法体制の形成……〔鳥海　靖〕……223
1 立憲体制への模索……223
2 自由民権運動と政府の対応……226
3 明治憲法体制の確立……231

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

3 日本資本主義の形成と展開……〔西川博史〕……239
1 国内経済の再編成と世界市場……239
2 日本資本主義の確立と綿紡績業……242
3 日本帝国主義の展開と構造的特質……246
4 近代日本の対外政策と国際政局……〔鳥海　靖〕……250
1 一九世紀末期の日本外交とその国際環境……250
2 日露戦争と国際政局……255
3 第一次世界大戦後の協調外交……259
5 政党政治と社会運動……〔山本四郎〕……266
1 日露戦争以後――桂園時代――……266
2 あいつぐ政変と第一次大戦……270
3 慢性不況と政党政治……273
6 軍部の支配と第二次世界大戦……〔鳥海　靖〕……277
1 「日本ファシズム」論をめぐって……277
2 対外危機と軍部の台頭……281
3 日中戦争から太平洋戦争へ……287
7 占領体制……〔竹前栄治〕……294
1 終戦前における占領政策……294

2　占領体制の成立……297
3　占領下の諸改革……302
4　占領体制の意義……304
■第Ⅳ章・参考文献……306
索　引

執筆者紹介（五十音順）

荒居英次（日本大学文理学部教授）
今中寛司（同志社大学文学部教授）
大石慎三郎（学習院大学経済学部教授）
坂本賞三（広島大学文学部助教授）
佐々木銀弥（中央大学文学部教授）
志田諄一（茨城キリスト教大学文学部教授）
鈴木国弘（日本大学文理学部助教授）
鈴木英雄（共立女子大学助教授）
高橋崇（東京経済大学経済学部教授）
竹前栄治（東京経済大学経済学部教授）
田代脩（埼玉大学教養学部教授）
鳥海靖（東京大学教養学部助教授）
中尾堯（東京立正女子短期大学教授）
西川博史（北星学園大学経済学部助教授）
林董一（愛知学院大学法学部教授）
藤野保（九州大学文学部教授）
黛弘道（学習院大学文学部教授）
三鬼清一郎（名古屋大学文学部助教授）
毛利敏彦（大阪市立大学法学部教授）
山中寿夫（広島大学学校教育学部教授）
山本四郎（京都女子大学文学部教授）

第Ⅰ章　古　代

1　古代国家の成立

1　原始の日本

旧石器文化の発見

一九四九（昭和二四）年、群馬県桐生市の郊外岩宿で関東ローム層（洪積世から沖積世はじめにかけて堆積した火山灰土）中から土器をともなわない石器群が発掘され、ここにはじめて縄文文化より古い石器文化の存在が明らかとなった。これを先縄文文化とも無土器文化もしくは先土器文化とも呼ぶが、ローム層が洪積層であるとすれば、そこから発見された石器はヨーロッパの旧石器に対比されるものであろう。その後、各地で旧石器の発見が相次ぎ、今日では北は北海道から南は鹿児島県まで日本列島の全域にこの文化がひろく分布していたこと、また、旧石器文化が敲打（こう）器文化→刃（じん）器文化→尖頭（せんとう）器文化→細石器文化というように推移し、その後をうけて土器のあらわれる縄文時代に移行したものと推測されることなどが明らかになった。

いっぽう、一九五七（昭和三二）年、愛知県豊橋市郊外牛川町の石灰岩採掘場から一〇数万年前の洪積世人類の上腕骨が発見され、次いで翌年、静岡県引佐郡三ケ日町の石灰岩採石場から頭骨の破片が

発見された。これにより洪積世人類すなわち旧石器時代人の存在も確認されるに至り、日本列島における人類の歴史はいっきょに一〇数万年もさかのぼることになった。

縄文文化の展開

洪積世末期、今から一万年ほど前に氷河期が終わって気温が上昇すると、それにともなって海進がおこり、日本は大陸から切り離されて列島を形成することとなるが、ちょうどそのころから縄文土器を指標とする新文化が展開される。このいわゆる縄文文化はその後八〇〇〇年以上の長期間にわたって日本列島をおおって繁栄を続けたが、時間の長い割には進歩は緩慢であり、最終段階では自力でそれ以上の発展を遂げることができない状態であったと考えられている。この時代は、人々の間に貧富の差はなく、階級未分化の社会が長く続き、したがって政治という現象はいまだ見られなかった。

2　倭人の登場

倭人の諸国

『漢書』地理志に「夫れ楽浪海中に倭人あり。分れて百余国となる。歳時を以て来り献見すと云ふ」とあるのが、日本人が「倭人」という名で歴史書に登場する最初であるが、楽浪郡は漢の武帝が西暦紀元前一〇八年に設置した四郡の一つであるから、この記事はおよそ前一世紀の状況を告げるものであり、当時倭人は多くの小国家を成して互いに抗争していたと推考される。また、定期的に（歳時を以て）朝貢したとあるのは、倭の諸王たちが王権強化の手段として中国文化の摂取に積極的であったことを示している。すでに日本列島には政治的社会が成立し階級分化もある程度進んでいたことが察せられるが、このことは考古学的知見によっても十分証明されるの

である。

紀元五七年、奴国王が後漢の光武帝に朝貢したことは『後漢書』の倭伝に明記するところであり、当時、今の福岡市あたりに存在した奴国が倭人の諸国を一応統合して連盟の盟主の如き立場にあったことを思わせるのであるが、同書によれば、一〇七年には奴国ではない別国（倭面国・倭面土国など用字一定せず）が一六〇人という大量の奴隷を献上しているから、盟主の地位は半世紀で交代したようである。しかもこの別国の地位も安泰ではなく、『後漢書』によれば倭人の諸国はその後大きな混乱に陥ったという。弥生時代の後期に入ると石器が急速に影をひそめ、金属器が普及するという考古学上の事実は、右の史料に対応するものであろう。二世紀中葉以降、倭人の諸国間の秩序は崩壊し、弱肉強食の戦乱を経てその再編成の機運が熟していったのである。

女王卑弥呼の登場

このような情勢をバックに女王卑弥呼が諸国王により共立され、ようやく混乱がおさまったという。『魏志』倭人伝によれば、彼女は呪術をよくすることによって人々の心服を得たというから、彼女は男王たちにはない超越的・宗教的な能力と権威のゆえに女王に推戴されたシャーマン（巫女王）であり、また、それゆえに未婚であった。彼女の夫は人間ではなくて神であり、神は彼女に乗り移り、彼女の口を借りて神意を宣べる。その神託は一男子によって卑弥呼の弟に伝えられ、弟がその神託のままに人民を統治したのである。これは、言いかえれば、国を治めるためにはまず神意をうかがわなければならず、そのためには巫女によって神を祭らなければならないことを示している。かくて「まつりごと」なる日本語は古くは政治の意味にも祭祀の意味にも用いられたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com